

平成25年度知事と県民の意見交換会概要

テーマ：地域資源を活かした、協働による地域活性化

日時：平成25年8月6日(火) 12:30～15:00

場所：鹿角市 関善賑わい屋敷 奥座敷

(知事)

今日は、「地域資源を活かした、協働による地域活性化」というテーマである。

今後、少子高齢化の社会を迎える中で、地域で生きていくためには、もう一度地域を見つめ直し、地域の有形無形の資源を捉えて、時代に合った形で地域全体でのまとまりをつくっていかなくてはならない。

観光地であれば、その協働が観光や経済の活性化、雇用の確保に結びつく。

この後、皆様方の活動内容の課題や方向性、行政への要望等をお伺いし、新しい計画の策定に役立てていきたい。

※知事あいさつの後、同会場にて、十和田八幡平草木染の里実行委員会の活動内容を見学。

(A氏)

この建物を買って取ってから、10年以上自力で維持、保存、活用している。行政では保存できないということで、修繕費を稼ぐため、NPOの整備活動そのものを見てもらう観光事業を実施してきた。その結果、文化財保存や町おこしの研修で訪れる団体が増えてきて、鹿角で初めての旧商店街の中にある観光施設になった。また、向かい側にある定期市場の指定管理者にもなり、この建物と併せてセットで観光PRをするようになった。

しかし、観光客は減る一方であったため、この建物以外のもう一つの新しい観光産業をつくろうと、鹿角の文化財である紫根染・茜染を復活させ、「十和田八幡平草木染の里づくり実行委員会」を立ち上げた。低迷している十和田・八幡平観光ゾーンに、草木染めの里という新しいイメージをつくり、文化の継承や観光等に活用しようと思って活動している。

特に、絶滅危惧種であるニホンムラサキの栽培に力を入れている。染色には栽培したものしか使えないため、その大量栽培を目標にしている。ニホンムラサキは、染色材料のほかに、薬や化粧品材料としても価値が高く、新しい農産物としても有効だと思っている。

(B氏)

当NPOは、中滝と八幡平の2か所に施設を持っている。中心となっているのが、十和田湖の近くにある中滝の廃校になった小学校を利用した施設である。近隣の小学校との交流で、夏休みに子ども会の利用や学年レクなどの学校行事にも使ってもらっている。

特に食の体験では、石窯で焼くピザづくりや、発祥の地といわれているきりたんぽづくり等、地元の食材を使ってさまざまな体験ができる。

また、東北でも数少ない森林セラピーステーションが近隣に2か所あり、そのセラピーロードの案内も実施している。

(C 氏)

昭和 63 年に心身障害者小規模作業所として開設されたが、平成 18 年 9 月に特定非営利活動法人として認定され、平成 19 年 4 月から NPO 法人として再スタートした。作業内容は刺し子製品づくり、布団乾燥作業、ブルーベリーの栽培である。

県の果樹センターの協力を得て、挿し木から始めたブルーベリー栽培が軌道に乗り、今年は 3 キロぐらい採れ、来年からは販売も考えている。ブルーベリー栽培は結構手間がかかるので、お寺の互助会や公務員の退職者の会、畑の所在地の自治会等、市民の皆さんから草取りや薬の散布等のボランティアの支援を受けて、利用者とのコミュニケーションアップに努めている。

これからの課題は、自治会との交流の場をつくることと、利用者が一般就労できるように支援していくことである。

(D 氏)

かづの観光物産公社は、鹿角八幡平 IC を降りて 3 分のところにある、鹿角市の玄関口となる施設である。

「あんたらあ」には、展示館があり、鹿角の花輪ばやしの山車が飾られているほか、手作り館として、組木細工体験、裂き織体験等 5 つの体験館がある。ここでは、きりたんぼや味噌漬けたんぼ体験も可能で、今シーズンは修学旅行生に人気があった。

「食」の分野では、レストランや産直の売店があり、地元の野菜を数多く揃えている。旅行業の事業としては、伝説の里かづの体感泊覧会「でんぱく」を行っている。

(E 氏)

花輪市民センターは、昔は公民館だった。今は行政組織ではなく、花輪地域づくり協議会が指定管理団体として運営しており、私達も協議会職員として活動している。昔、公民館でやっていたことを引き続きやりながら、自治会組織や子ども会組織等の地域組織の強化と連携をしていくような動きもとらなければならないということで、そちらにも目を向け始めている。子ども会活動のフォローや、子どもが参加する野球大会、バレーボール大会、駅伝競技大会などのスポーツ大会の運営等を行っている。

思うに、鹿角にはいいところがたくさんあるが、それらは点としては存在していても、なかなか線としてつながらないのが残念である。

老人クラブは組織だって活動しているが、高齢化しているからといって必ずしも活動が順調なわけではなく、老人クラブの中でも高齢層と若年層が分かれてしまい、うまく融合できず、結果として活動をやめてしまうところもある。

子ども会では、子どもが減っており、活動が難しくなっている。そうなってしまうと、今までやってきた子ども会活動が廃れてつながらなくなってしまうので、非常に危機感を持っている。今後、それをいかにつなげていき、今の子どもが父親や母親になったときに、自分たちもやるぞ、というふうになることが大事だと思いながら活動している。

(F 氏)

三ツ矢沢自治会として取り組んだのではないが、「でんぱく」では「山かげから見た尾去沢鉦山の歴史」という着地型観光に取り組んだ。自分の集落は、尾去沢鉦山の裏側にある特殊な地域、地形であり、坑道の中を通学路として使っていたという話をしたところ、大変好評をいただき、2 回開催したうち 2 回とも満員になった。

県北若者会議に参加して会議のメンバーとなり、よく他の集落を見に行ったり勉強しに

行ったりした。そこで、限界集落に人を呼ぶのもいいものだなと感じた。自分も限界集落に人を呼ぶ着地型観光ができるのではないかと思い、プログラムづくりに取り組んだ。

このプログラムの募集をしたら、結構客が集まり、当日は集落の方々の協力も得て、大成功に終わった。

「でんぱく」に取り組んでから、身近に色々な資源があることに気づき、集落の活動も活発になった。鹿角市だけでなく、県内にも色々な資源があると思うが、それらをうまく活用していけば、地域が元気になるのではないかと思う。

尾去沢鉱山は、よく人が訪れる坑道のほかに、あまり知られていない鉱山の裏側の場所をもう少しオープンにすると、さらに人気も出ると思う。団体客が大勢来る観光でなくとも、毎日何十人か見に来てくれるようになればいいと思う。

#### (G 氏)

鶺鴒<sup>ときと</sup>は小坂町の東にある。昔は鉱山が盛んで学校もあり、かなり栄えていた。鉱山の煙害がなくなってから、ヤマブドウと掛け合わせてワイン用のブドウをつくることとなり、本格的に栽培を始めた。ブドウづくりには結構手をかけなければいけないが、問題なのが後継者についてである。限界集落に近い状態で子どもが非常に少なく、厳しい状況である。

集落では昔から大太鼓もやっているが、高価な物で、触ると破けるからといって、子供たちに触らせなかったことから、後継者が育たなかった。今では鹿角ふるさと大太鼓の会という会が鹿角市であり、それに参加させていただいて一緒に活動している。

元気ムラの関係で国際教養大学の学生さんと交流したこともあった。

やはり、若い人がいたら「一緒にやろう」と巻き込んでいかなければならないと感じる。

#### (H 氏)

高齢者交流サロンは、昨年始まった。利用者の方が帰られる時に、「来て良かった」と思えるような施設を目指している。薬剤師や医療事務を退職された方も来ており、健康に関する話題も多く、利用者はみんなで楽しく活動している。色々な話をしたり、簡単なゲームやクイズをしたり、みんなで歌を歌ったりするほかに、利用者自身が落語や講話をすることもある。そのほかに、健康のためにダンスやラジオ体操も行っている。

利用者の最高年齢は95歳であり、その他はほとんど60代であるが、皆さんしゃきっとしている。一週間に一度、木曜日の午後1時から4時と時間を決めているため、みんなが集まりやすい。

知事には、県としてどのような高齢者の社会にしていきたいのかお尋ねしたい。

#### (局 長)

「高齢者交流サロン」は、鹿角市が補助金を出して運営しているが、利用者同士の交流を目的としている。新たな施設をつくるのではなく、Hさんのように既存の施設を利用したり、自治会でやっているところもある。

「でんぱく」については、「伝説の里かづの体感泊覧会」の略であり、昨年50のプログラムが、今年は61になっている。これについて、Dさんに説明をお願いしたい。

#### (D 氏)

でんぱくは、地域の皆様が持っている知恵、技術をそのままなくさず、継承されてきたものをずっと後世に残していくということが目的である。前は「歩く」という種のプログラムが多かったが、今回は「食」「作る」「見る」という種でつくった。今回は10月12

日に始まる。

(知 事)

紫根染・茜染のように、かつての手法がなくなってきていて、技術・技法が伝承されない状況であるが、それを復活させようという気運は全国的に高い。

Bさんのところは、道路沿いにぼつりとあるので、なかなか認知度が上がらない。県外でなくても、県内地域の人に、例えば、「十和田湖に行った際に寄ってみよう」と思わせるような売り込み方ができればおもしろい。地域としてではなく、休憩スポットとして、口コミやソーシャルネットワーク等で広めて、お客さんを得る手法もあると思う。

小学校の統廃合がたくさん行われているが、廃校になった学校を教育の一貫として活用するのはとても良いことである。

出発の家の布団乾燥作業は、一般のお客さんから頼まれるのか。

(C 氏)

大きな病院やホテルの布団は、大館の業者が扱っているので、うちでは個人の家を開拓していきたい。お客様と利用者との交流を図り、利用者にはこのような子がいるということをも市民の皆様に分かってほしい。

(知 事)

障害者小規模作業所でボランティアをした経験があるが、なかなかそのような施設で物を売るとするのは難しい。絶対的価値で買っていただくといいが、同情で買っていただくのは、売る側として心苦しい。

道の駅に花輪ばやしの山車が置いてあるが、今の時代山車を置いてあるのは珍しい。鹿角花輪にはいろいろな観光の題材がある。

イベントは地元の人に来るようになれば、地域を越えて人々が集まってくる。これをだんだん広げて、観光につなげるのも良いと思う。

県内でもあんとらあのような施設はなかなかないので、なんとか頑張っていたきたい。

老人クラブについては、確かに階層化している。戦前生まれである後期高齢者と、戦後生まれである団塊の世代とで若干の違いがあり、なかなかうまく交わらない。

指定管理での運営については、なかなか難しいのではないかと。

(E 氏)

難しい。指定管理という状況のもと、お金はもらえなくても、様々なことを頼まれる。

(知 事)

指定管理は日本と欧米で全然違う。欧米は有料の事業をやり、利益を生み出し、その利益で新しいことをやる。日本の指定管理は役所がルールをガチガチに決めて堅い制度になっている。

(E 氏)

市民センターは公的な施設であるし、お金を儲けることを目的としたくないが、就労場所として、ここでずっと働きたいと思える職場にしたい。地元就職を希望している高校生はたくさんいるが、地元就職先がないために地元を離れてしまうケースが非常に多い。高校生のなかには市民センターのような場所で働きたいと考える子も多くいる。お金を儲

けるのがメインではなくとも、成長していく団体になりたい。

(知 事)

三ツ矢沢集落で、地元の人達にとって当たり前と思うものでも、めったに見ないものだと意外と新鮮である。地元目というよりも、外からの目で見ることが大切である。Fさんはまだ40代ということで若い、若い人でそうした活動をする人がなかなかいない。

(F 氏)

私は、若者会議に参加して、秋田県を元気にしたいという人たちにたくさん出会い、自分の集落を歴史に残したいと思った。

(知 事)

Fさんの集落だけで人を呼ぶのはなかなか難しい。観光客が史跡尾去沢鉱山を目当てに来たら、地域でも何か別のことをしているのを見つけるというようなタイアップの工夫が必要である。

また、<sup>ときと</sup>鴫集落に大太鼓があることをほとんどの方は知らない。太鼓の伝承には、いかに子どもに興味を持たせるかが重要である。

国際教養大学との交流については、小坂町との距離が問題であると感じる。

(G 氏)

国際教養大学と交流したとき、みんな喜んでいたが、どうしても距離があるので、なかなか交流が進まない。

(知 事)

<sup>ときと</sup>鴫のブドウ栽培で、小坂ワインをつくっているのか。

(G 氏)

そうである。初めは山形県や岩手県のワイナリーに製造をお願いしていた。現在は、花輪のワイナリーにもお願いしており、「<sup>ときと</sup>鴫」というラベルで販売している。

(知 事)

高齢者交流サロンについて、各町内に一箇所ずつ施設をつくることは現実的には無理であるが、かといって数箇所にしかなければ、そこまで足を運ぶのが大変になってしまう。そういう点で難しいことではあるが、自宅など既存の施設を利用して場所を設けるという発想は良いと思う。

先ほど、Hさんからご質問いただいた高齢者対策についてであるが、一つは制度としての医療福祉分野に医師不足という問題がある。秋田大学や弘前大学に寄付講座をつくり、医学部卒業後数年は地元の医療機関に勤めてもらう等の施策により、医師不足は一定の時期を過ぎると解消してくる。

もう一つは、高齢者がいかに人と交流して健康寿命を長くするかである。また、除排雪や買い物支援については、行政だけではなく、地域のボランティアやNPO団体と組み合わせて実施していかなくてはならない。

あとは、行政としては、一人暮らしの高齢者が突然家の中で倒れた時、どのようにして情報を得るのか、情報収集システマ的なものを含めて対策しなければならない。こういっ

た高齢者支援システムは、各組織が連携してチームをつくって構築していかななくてはならない。

Hさんの交流サロンのように、家にこもらずに出てきてもらうのが最も大切である。

(H 氏)

県の鹿角地域振興局の支援事業として、独身男女のダンスの集まりを実施している。現在2期目。しかし、期間が3か月と限定されている。3か月で結婚まで結びつくというのは到底できるものではない。

もう少し時間をいただくか、あるいは、3か月と期間を区切っても、県の支援事業であるという名前を貸していただければ、またやり方が違ってくるので、もう少し後押ししていただければありがたい。

市は広報を出しているが、県の地域振興局には一般の人は馴染みがないし、広報的なものを出しているのかも分からないが、もう少し事業についてアピールしていただければありがたい。個人で広報するには限度がある。

(局 長)

PRについては我々ができるのはホームページ程度であり、PRについては市とタイアップするなど、相談させていただきたい。

(知 事)

関善を買い取ったということだが、老朽化に対する補修の財源はどのように考えているか。

(A 氏)

国の登録文化財であり、自費で修理している。しかし、民間で買い取って保存していくのは不可能に近い。人件費については、すべてボランティアで、無償である。

定期市の指定管理者にもなっているが、この建物と合わせて観光化し、町の中に観光客を連れてきたい。鹿角市は観光施設が山にばかりあるが、経済効果を上げるため町の中に連れてきたい。

商店街は観光で生活してきた経験がないため、そうした感覚がない。せっかくここに観光バスが止まっても、観光客を相手にする店を始めようという人がいない。

(C 氏)

先ほど、知事も話されたが、同情することで障害者理解をしたと思う人が多いのは確かである。教育の場で、幼い頃から障害者と交流を持って、こういう子どももいるのだなと理解できるような取組が大切だと思っている。

(知 事)

確かに大事なことである。完全な人というのはいない。私自身も、2年前に病気をして未だに少し障害が残っているところもある。世の中で障害者に対する意識醸成をしなければならぬと感じる。

障害者の子と自分の子を遊ばせたくないとする親もいる。子どもたちは特に何も感じていないが、親が差別をしてしまっている。むしろ親に対する意識改善が必要だと感じる。

(E 氏)

ボランティアに関して、今の高校生はボランティアに関心があり、ボランティア活動を通して充実感や達成感を感じる子が多い。その経験が地域への愛着や、地域の人を思いやる意識につながるのだと思う。そういうことも併せて教育や地域活動に取り入れて欲しい。

しかし、ボランティアに頼りすぎても良くないと感じることもあり、組織という土台があって、その上でボランティアの方に協力してもらおう形がいいと思う。ボランティア精神を醸成することも地域活性化につながると思う。

(知 事)

協働は、常に課題を抱える。何かの課題が解決すると、次の課題が出てくる。常に完成形というものはないと考える。しかし、協働が必要な時代になっているので、多くの人を自然な形で巻き込み、お互いが自然な形でできることをやっていくべきである。その中で地域で一つの連携を保って、近所で仲良く楽しく過ごせる社会をつくることが大切である。

協働社会の在り方については、県として専門家サイドにも議論いただいているが、ここでいただいた現場の話と組み合わせて、政策を仕上げていきたい。皆様には引き続き、今後もよろしくお願ひしたい。

(終了)